

修禪寺物語

岡本綺堂

青空文庫

(伊豆の修禅寺に頼家の面というあり。作人も知れず。由来もしれず。木彫の
 飯面にて、年を経たるまま面目分明ならねど、いわゆる古色蒼然たるもの、観来
 たつて一種の詩趣をおぼゆ。当時を追懐してこの稿成る。)

登場人物

おもてつくりし
面作師

やしやおう
夜叉王

夜叉王の娘 かつら

同 かねで

かねでの婿 春彦

げんぎんご
源左金吾頼家

かげやす
下田五郎景安

かなくぼひようえのじようゆきちか
金窪兵衛尉行親

修禅寺の僧

行親の家来など

第一場

伊豆の国狩野かのの庄、修禪寺村（今の修善寺）桂川のほとり、夜叉王の住家。

藁葺わらぶきの古びたる二重家体。破れたる壁に舞樂の面などをかけ、正面に紺暖簾こんのれんの出入口あり。下手に炉を切りて、素焼の土瓶どびんなどかけたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹。そのうしろは畑を隔てて、塔の峰つづきの山または丘などみゆ。元久元年七月十八日。

（二重の上手につづける一間の家体は細工場さいくわばにて、三方に古りたる蒲がますだれ簾をおろせり。庭さきには秋草の花咲きたる垣かきに沿うて荒むしろを敷き、姉娘桂、二十歳。妹娘楓、十八歳。相對して紙かみぎぬた砧しづなを擣うっている。）

かつら（やがて砧の手をやめる）一いっとき晌あまりも擣ちつづけたので、肩も腕しびも痺るるよ

うな。もうよいほどにして止やみようでないか。

かえで とは言うものの、きのうまでは盆休みであったほどに、きょうからは精出して働こうではござんせぬか。

かつら 働きたくばお前ひとりで働くがよい。父とと様にも春彦どのにも褒ほめられようぞ。

わたしはいやじゃ、いやになった。(投げ出すように砧を捨つ)

かえで 貧てわざの手業に姉きょうだい妹が、年ごろ擣ちなれた紙砧を、とかくに飽きた、いやになつたと、むかしに変わるお前がこのごろの素振りには、どうしたことでござるかろう。

かつら (あざ笑う) いや、昔とは変らぬ。ちつとも変らぬ。わたしは昔からこのような

ことを好きではなかつた。父さまが鎌かまくら倉においでなされたら、わたしは昔からこのような

まいものを、名みょうもん聞きを好まれぬ職人かたぎ気質とて、この伊豆いずの山家に隠かくれ栖すみ、親につれて

子供までも鄙ひなにそだち、しようことなしに今の身の上じゃ。さりとしてこのままに朽くちち果

てようとは夢にも思わぬ。近いいためしは今わたしが擣っている修禅寺紙、はじめは賤いや

しい人の手につくられても、色好紙いろよしがみとよばれて世に出づれば、高貴のお方の手にも触

る。女子おなごとてもその通りじゃ。たとい賤いやしゆう育つても、色好紙の色よくば、関白大

臣將軍家のおそばへも、召いし出されぬとは限るまいに、賤いやの女めがなりわいの紙砧、いつ

まで擣ちおぼえたとて何となるうぞ。いやになつたと言うたが無理か。

かえで それはおまえが口癖に言うことじやが、人には人それぞれの分があるもの。將軍家のお側近う召さるるなどと、夢のようなことをたのみにして、心ばかり高う打ちあがり、末はなんとなるうやら、わたしは案じられてなりませぬ。

かつら お前とわたしとは心が違う。妹のおまえは今年十八で、春彦という男を持った。

それに引きかえて姉のわたしは、二十歳はたちという今日の今まで、夫もさだめずに過したは、あたら一生を草やの家に、住み果つまいと思えばこそじや。職人風情ふせいの妻となつて、満足して暮すおまえらに、わたしの心はわかるまいのう。(空そらうそぶ 嘯く)

(楓の婿春彦、二十余歳、奥より出づ。)

春彦 桂どの。職人風情とさも卑しい者のように言われたが、職人あまたあるなかにも、

おもてつくりし

面作おもてつくりし 師といえ、世に恥かしからぬ職であろうぞ。あらためて申すに及ばねど、わ

が日本開闢かいびやく 以来、はじめて舞樂のおもてを刻まれたは、もったいなくも聖徳太子、

つづいて藤原淡海公、弘法大師、倉部くらべの春日かすが、この人々より伝えて今に至る、由緒正ゆいしよ

しき職人とは知られぬか。

かつら それは職が尊いのでない。聖徳太子や淡海公という、その人々が尊いのじや。か

の人々も生業なりわいに、面作りはなされまいが……。

春彦 生業にしては卑しいか。さりとは異なることを聞くものじやの。この春彦が明日にも

あれ、稀代の面おもてをつくり出して、天下一の名を取つても、お身は職人風情あなごと侮るか。

かつら 言おんでもないこと、天下一でも職人は職人じや、殿上人や弓取りとは一つになる

まい。

春彦 殿上人や弓取りがそれほどに尊いか。職人がそれほどに卑しいか。

かつら はて、くどい。知れたことじやに……。

(桂は顔をそむけて取り合わず。春彦、むつとして詰めよるを、楓はあわてて押し隔てる。)

かえで ああ、これ、一旦こうと言ひ出したら、あくまでも言ひ募るが姉あねさまの氣質、逆

ろうては悪い。いさかいはもう止してください。

春彦 その氣質を知ればこそ、日ごろ堪忍していれど、あまりと言えば詞ことばが過ぐる。女房

の縁につながりて、姉と立つればつけ上り、ややもすればわれを軽しむる面憎つらにくさ。仕

儀によつては姉とは言わさぬ。

かつら おお、姉と言われずとも大事ござらぬ。職人風情を妹婿に持ったとて、姉の見得みえ

にも手柄にもなるまい。

春彦 まだ言うか。

(春彦はまたつめ寄るを、楓は心配して制す。この時、細工場の簾のうちにて、父の
声。)

夜叉王 ええ、騒がしい。鎮まらぬか。

(これを聴きて春彦は控える。楓は起つて蒲簾をまけば、伊豆の夜叉王、五十余歳、
烏帽子、筒袖、小袴にて、鑿と槌とを持ち、木彫の仮面を打っている。膝のあたり
には木の屑など取り散らしたり。)

春彦 由なきことを言い募つて、細工のおさまたげをも省みぬ不調法、なにとぞ御料簡
くださりませ。

かえで これもわたしが姉様に、意見がましいことなど言うたが基。姉様も春彦どのも必
ず叱つて下さりまするな。

夜叉王 おお、なんで叱ろう、叱りはせぬ。姉妹の喧嘩はままあることじゃ。珍らしゆ
うもあるまい。時に今日ももう暮るるぞ。秋のゆう風が身にしみるわ。そちたちは奥へ
行つて夕飯の支度、燈火の用意でもせい。

二人 あい。

(桂と楓は起つて奥に入る。)

夜叉王 のう、春彦。妹とは違つて気がさの姉じや。同じ屋根の下に起き臥ふすれば、一年三百六十日、面白からぬ日も多かるうが、何事もわしに免じて料簡せい。あれを産んだ母親は、そのむかし、都の公家衆くげしゅうに奉公したものの、縁あつてこの夜叉王と女夫めおとになり、あずまへ流れ下つたが、育ちが育ちとて氣位高く、職人風情に連れ添つて、一生むなしく朽ち果つるを悔みながらに世を終つた。その腹を分けた姉妹、おなじ胤たねとはいひながら、姉は母の血をうけて公家氣質、妹は父の血をひいて職人氣質、子の心がちがえば親の愛も違つて、母は姉びいき、父は妹いせ。思い思いに子どもこどものいせ争いから、埒うちもない女夫喧嘩などしたこともあつたよ。はははははは。

春彦 そう承われれば桂どのが、日ごろ職人をいやしみ嫌い、世にきこえたる殿上人か弓取りならでは、夫に持たぬと誇らるるも、母御ははごの血筋をつたえしたため、血は争われぬものでござりまするな。

夜叉王 じやによつて、あれが何を言おうとも、滅多に腹は立てまいぞ。人を人とも思わぬ、氣位きくらひ高う生まれたは、母の子なれば是非がないのじや。

(暮の鐘きこゆ。奥より楓は燈台を持ち出て出づ。)

春彦 おお、取り紛れて忘れていた。これから大仁おおひとの町まで行って、このあいだあつら誂えて

おいた鑿のみと小刀さすがをうけ取つて来ねばなるまいか。

かえで きようはもう暮れました。いつそ明日あすにこなされては……。

春彦 いや、いや、職人には大事の道具じゃ。一刻も早う取り寄せておこうぞ。

夜叉王 おお、職人はその心がけがのうてはならぬ。更ふけぬ間に、ゆけ、行け。

春彦 夜とは申せど通いなれた路、一晌いつときほどに戻つて来まする。

(春彦は出てゆく。楓は門かどにたちて見送る。修禪寺の僧一人、燈籠とうろうを持ちて先に立

ち、つづいて源の頼家卿、二十三歳。あとより下田五郎景安、十七八歳、頼家の太刀をささげて出づ。)

僧 これ、これ、將軍家のおしのびじや。粗相があつてはなりませんぞ。

(楓ははつと平伏ひれふす。頼家主従すすみ入れば、夜叉王も出で迎える。)

夜叉王 思いもよらぬお成りとして、なんの設けもござりませぬが、まずあれへお通りくださいませ。

(頼家は縁に腰をかける。)

夜叉王 して、御用の趣は。

頼家 問わずとも大方は察しておろう。わが面めんてい体を後のかたみに残さんと、さきにその方を召し出し、頼家に似せたる面おもてを作れと、絵姿までも遣つかわしておいたるに、日を経ふるも出しゅつ来たいせず、幾たびか延引を申し立てて、今まで打ち過ぎしは何たることじゃ。

五郎 多寡たかが面一つの細工、いかに丹精を凝らすとも、百日とは費すまい。お細工仰せつけられしは当春の初め、その後すでに半年をも過ぎたるに、いまだ献上いたさぬとはあまりの懈怠けたい、もはや猶予は相成らぬと、上うえ様の御機嫌ごきげんさんざんじゃぞ。

頼家 予は生まれついでにの性急じゃ。いつまで待てど暮せど埒あかず、あまりに齒痒はがゆう覚ゆるまま、この上は使いなど遣わすこと無用と、予がじきじきに催促にまいった。おのれ何ゆえに細工を怠りおるか。仔細をいえ、仔細を申せ。

夜叉王 御立腹おそれ入りました。ござりまする。もったいなくも征夷大將軍、源氏の棟とうり梁ようのお姿を刻めとあるは、職のほまれ、身の面目、いかでか等閑なわざりに存じましようや。御用うけたまわりですでに半年、未熟ながらも腕限り根かぎりに、夜昼となく打ちましても、意にかなうほどのもの一つもなく、さらに打ち替え作り替えて、心ならずも延引に延引をかさねましたる次第、なにとぞお察しくださりませ。

頼家 ええ、催促の都度におなじことを……。その申しわけは聞き飽いたぞ。

五郎 この上はただ延引とのみで相済むまい。いつのころまでにはかならず出来るか、あらかじめ期日をさだめてお詫を申せ。

夜叉王 その期日は申し上げられませぬ。左に鑿をもち、右に槌を持てば、面はたやすく成るものと思し召すか。家をつくり、塔を組む、番匠などとは事変りて、これは生なき粗木を削り、男、女、天人、夜叉、羅刹、ありとあらゆる善悪邪正のたましいを打ち込む面作師。五体にみなぎる精力が、両の腕におのずから湊まる時、わがたましいは流るるごとく彼に通いて、はじめて面も作られます。ただしその時は半月の後か、一月の後か、あるいは一年二年の後か。われながら確とはわかりませぬ。

僧 これ、これ、夜叉王どの。上様は御自身も仰せらるるごとく、至つて御性急でおわします。三島の社の放し鰻を見るように、ぬらりくらりと取止めのないことばかり申し上げていたら、御疝癖がいよいよ募ろうほどに、こなたも職人冥利、いつのころまでと日を限つて、しかと御返事を申すがよからうぞ。

夜叉王 じゃと言うて、出来ぬものはのう。

僧 なんの、こなたの腕で出来ぬことがあるう。面作師も多くあるなかで、伊豆の夜叉王

といえば、京鎌倉までも聞えた者じやに……。

夜叉王 さあ、それゆえに出来ぬと言ふのじや。わしも伊豆の夜叉王と言へば、人にも少しは知られたもの。たといお咎め受きようとも、己が心に染まぬ細工を、世に残すのはいかにも無念じや。

頼家 なに、無念じやと……。さらばいかなる祟りを受きようとも、早急には出来ぬ
というか。

夜叉王 恐れながら早急には……。

頼家 むむ、おのれ覚悟せい。

(癩癥募りし頼家は、五郎のささげたる太刀を引つ取つて、あわや抜かんとす。奥より桂、走り出づ。)

かつら まあ、まあ、お待ちくださいませ。

頼家 ええ、退け、のけ。

かつら まずお鎮まりくださりませ。面はただ今献上いたします。のう、父様。

(夜叉王は黙して答えず。)

五郎 なに、面はすでに出来しておるか。

頼家 ええ、おのれ。前後不揃いふぞろのことを申し立てて、予をあざむこうでな。

かつら いえ、いえ、嘘うそいつわりではござりませぬ。面はたしかに出来しております。

これ、父様。もうこの上は是非がござんすまい。

かえで ほんにそうじゃ。ゆうべようやく出来したというあの面を、いつそ献上なされては……。

僧 それがよい、それがよい。こなたも凡夫じゃ。名も惜しかろうが、命も惜しかろう。

出来した面があるならば、早う上様にさしあげて、お慈悲をねがうが上分別じゃぞ。

夜叉王 命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知ったことではない。黙っておいやれ。

僧 さりとて、これが見ていらりようか。さあ、娘御。その面を持って来て、ともかくも

御覽に入れたがよいぞ。早う、早う。

かえで あい、あい。

(かえでは細工場へ走り入りて、木彫の仮面めんを入れたる箱を持ち出づ。桂はうけ取り

て頼家の前にささぐ。頼家は無言にて桂の顔をうちまもり、心少しく解けたる体なり

)。

かつら いつわりならぬ証拠、これ御覧くださりませ。

(頼家は仮面を取りて打ちながめ、思わず感嘆の声をあげる。)

頼家 おお、見事じゃ。よう打ったぞ。

五郎 上様おん顔に生写しじゃ。

頼家 むむ。(飽かず打ち成るまも)

僧 さればこそ言わぬことか。それほどの物が出来していながら、とこう洩っておられたは、夜叉王どのも気の知れぬ男じゃ。ははははは。

夜叉王 (形をあらためる) 何分にもわが心にかなわぬ細工、人には見せじと存じましたが、こう相成つては致し方もござりませぬ。方々にはその面をなんと御覧なされます。頼家 さすがは夜叉王、あつぱれの者じゃ。頼家も満足したぞ。

夜叉王 あつぱれとの御賞美ははばかりながらおめがね違い、それは夜叉王が一生の不出来。よう御覧ごろうじませ。面は死んでおります。

五郎 面が死んでおるとは……。

夜叉王 年ごろあまた打つたる面は、生けるがごとしと人も言い、われも許しておりまして、不思議やこのたびの面に限つて、幾たび打ち直しても生きてる色なく、たましいもなき死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござります

る。

五郎 そちはさように申しても、われらの眼にはやはり生きてる人の面……。死人の相とは相見えぬがのう。

夜叉王 いや、いや、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。しかも眼に恨みを宿し、

何者をか呪うがごとき、怨靈怪異などのたぐい……。

僧 あ、これ、これ、そのような不吉のことは申さぬものじや。御意にかなえばそれで重畳、ありがたくお礼を申されい。

頼家 むむ。ともかくにもこの面は頼家の意にかのうた。持ち帰るぞ。

夜叉王 強つて御所望とござりますれば……。

頼家 おお、所望じや。それ。

(頼家は頤にて示せば、かつら心得て仮面を箱に納め、すこしく媚を含みて頼家にささぐ。頼家はさらにその顔をじつと視る。)

頼家 いや、なおかさねて主人に所望がある。この娘を予が手もとに召し仕いとう存ずるが、奉公さする心はないか。

夜叉王 ありがたい御意にござりまするが、これは本人の心まかせ、親の口から御返事は

申し上げられませぬ。

(桂は臆せず、すすみ出づ。)

かつら 父様。どうぞわたしに御奉公を……。

頼家 うい奴じや。奉公をのぞむと申すか。

かつら はい。

頼家 さらにこれよりその面をささげて、頼家の供してまいれ。

かつら かしこまりました。

(頼家は起つ。五郎も起つ。桂もつづいて起つ。楓は姉の袂をひかえて、心もとなげ

に囁く。)

かえで 姉さま。おまえは御奉公に……。

かつら おまえは先ほど、夢のような望みと笑うたが、夢のような望みが今かのうた。

(かつらは誇りがに見かえりて、庭に降り立つ。)

僧 やれ、やれ、これで愚僧もまず安堵いたした。夜叉王どの、あすまた逢いませうぞ。

(頼家は行きかかりて物につまずく。桂は走り寄りてその手を取る。)

頼家 おお、いつの間にか暗うなった。

(僧はすすみ出でて、桂に燈籠を渡す。桂は仮面の箱を僧にわたし、われは片手に燈籠を持ち、片手に頼家をひきて出づ。夜叉王はじつと思案の体なり。)

かえで 父さま、お見送りを……。

(夜叉王は初めて心づきたるごとく、娘とともに門口に送り出づ。)

五郎 そちへの御褒美は、あらためて沙汰するぞ。

(頼家らは相前後して出でゆく。夜叉王は起ち上りて、しばらく黙然としていたりしが、やがてつかつかと縁にあがり、細工場より槌を持ち来たりて、壁にかけたるいろいろの仮面を取り下し、あわや打ち砕かんとす。楓はおどろきて取り継る。)

かえで ああ、これ、なんとなさる。おまえは物に狂われたか。

夜叉王 せつば詰まりて是非におよばず、拙き細工を献上したは、悔んでも返らぬわが不運。あのような面が將軍家のおん手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と宝物帳にも記されて、百千年の後までも笑いをのこさば、一生の名折れ、末代の恥辱、所詮夜叉王の名は廃つた。職人もきよう限り、再び槌は持つまいぞ。

かえで さりとは短気でござりましょう。いかなる名人上手でも細工の出来不出来は時の運。一生のうちに一度でもあつぱれ名作が出来ようならば、それがすなわち名人ではご

ざりませぬか。

夜叉王　むむ。

かえで　拙い細工を世に出したをそれほど無念と思し召さば、これからいよいよ精出して、世をも人をもおどろかすほどの立派な面を作り出し、恥を雪いでくださりませ。

(かえでは縋りて泣く。夜叉王は答えず、思案の眼を瞑じている。日暮れて笛の声遠くきこゆ。)

第二場

おなじく桂川のほとり、虎溪橋こけいきようの袂。川辺には柳幾いくもと本たちて、芒すすきと芦あしとみだれ生いたり。橋を隔てて修禅寺の山門みゆ。同じ日の宵。

(下田五郎は頼家の太刀を持ち、僧は仮面めんの箱をかかえて出づ。)

五郎　上様は桂どのと、川辺づたいにそぞろ歩き遊ばされ、お供のわれわれは一足先へま

いれとの御意であつたが、修禪寺の御座所もはや眼のまえじや。この橋の袂たもとにたたずみて、お帰りを暫時相待とうか。

僧 いや、いや、それはよろしゅうござるまい。桂殿たおやめという嬬女たおやめをお見出しあつて、浮れあるきに余念もおわさぬところへ、われわれのごとき邪魔外道げじょうが付き纏まとうては、かえつて御機嫌を損ずるでござらうぞ。

五郎 なにさまのう。

(とは言いながら、五郎はなお不安の体にてたたずむ。)

僧 ことに愚僧はお風呂ふろの役、早う戻もとつて支度をせねばなるまい。

五郎 お風呂とておのずと沸いて出づる湯じや。支度を急ぐこともあるまいに……。まずお待ちやれ。

僧 はて、お身にも似合わぬ不粹をいうぞ。若き男おとこ女おんながむつまじゅう語らうているところに、法師や武士は禁物じやよ。ははははは。さあ、ござれ、ござれ。

(無理に袖をひく。五郎は心ならずも曳かるるままに、打ち連れて橋を渡りゆく。月出づ。桂は燈籠を持ち、頼家の手をひきて出づ。)

頼家 おお、月が出た。河原づたいに夜ゆけば、芒にまじる芦の根に、水の声、虫の声、

山家やまがの秋はまたひとしおの風情ふぜいじやのう。

かつら 馴なれてはさほどにもおぼえませぬが、鎌倉山の星月夜とは事変りて、伊豆の山家の秋の夜は、さぞお寂しゆうござりましょう。

(頼家はありあう石に腰打ちかけ、桂は燈籠を持ちたるまま、橋の欄に凭よりて立つ。

月明らかにして虫の声きこゆ。)

頼家 鎌倉は天下の覇府はふ、大小名の武家小路、葦いらかをならべて綺羅きらを競えど、それはうわべの栄えにて、うらはおそろしき罪の巷ちまた、悪魔の巢ぞ。人間の住むべきところでない。鎌倉などへは夢も通わぬ。(月を仰ぎて言う)

かつら 鎌倉山に時めいておわしなば、日本一の將軍家、山家そだちのわれわれは下司げすにもお使いなされまいに、御果報拙つたないがわたくしの果報よ。忘れもせぬこの三月、窟いわやも詣うでの下向路げこうみち、桂谷の川上で、はじめて御目見得をいたしました。

頼家 おお、その時そちの名を問えば、川の名とおなじ桂と言うたな。

かつら まだそればかりではござりませぬ。この窟ふたもとのみなかみには、二一本の桂の立木ありて、その根よりおのずから清水を噴き、末は修禅寺にながれて入れば、川の名を桂とよび、またその樹を女夫めおとの桂と昔よりよび伝えておりますと、お答え申し上げました

れば、おまえ様はなんと仰せられました。

頼家 非情の木にも女夫はある。人にも女夫はありそうな……と、つい戯れに申したのう。かつら お戯れかは存じませぬが、そのお詞が冥加にあまりて、この願かならずかなうようと、百日のあいだ人にも知らさず、窟へ日参いたせしに、女夫の桂のしるしありて、ゆくえも知れぬ川水も、嬉しき逢瀬にながれ合い、今月今宵おん側近う、召し出されたる身の冥加……。

頼家 武運つたなき頼家の身近うまいるがそれほどに嬉しいか。そちも大方は存じておろう。予には比企の判官能員の娘若狭といえる側女ありしが、能員ほろびしその砌に、不憫や若狭も世を去つた。今より後はそちが二代の側女、名もそのままに若狭と言え。かつら あの、わたくしが若狭の局と……。ええ、ありがとうございます。

頼家 あたかき湯の湧くところ、温かき人の情も湧く。恋をうしないし頼家は、ここに新しき恋を得て、心の痛みもようやく癒えた。今はもろもろの煩惱を断つて、安らげくこの地に生涯を送りたいものじや。さりながら、月には雲の障りあり。その望みもはかなく破れて、予に万一のことあらば、そちの父に打たせたるかのおもてを形見と思え。叔父の蒲殿は罪のうして、この修禪寺の土となられた。わが運命も遅かれ速かれ、お

なじ路をたどろうも知れぬぞ。

(月かくれて暗し。籠手、臙当、腹巻したる軍兵二人、上下よりうかがい出でて、
 芒むらに潜む。虫の声にわかになやむ。)

かつら あたりにすだく虫の声、吹き消すように止みましたは……。

頼家 人やまいりし。心をつけよ。

(金窪兵衛尉行親、三十余歳。烏帽子、直垂、籠手、臙当にて出づ。)

行親 上、これに御座遊ばされましたか。

頼家 誰じゃ。

(桂は燈籠をかざす。頼家透しみる。)

行親 金窪行親でござりまする。

頼家 おお、兵衛か。鎌倉表より何としてまいった。

行親 北条殿のおん使いに……。

頼家 なに、北条殿の使い……。さてはこの頼家を討とうがためな。

行親 これは存じも寄らぬこと。御機嫌伺いとして行親参上、ほかに仔細もござりませぬ。

頼家 言うな、兵衛。物の具に身をかためて夜中の参入は、察するところ、北条の密意を

うけて予を不意撃ちにする巧みであろうが……。

行親 天下ようやく定まりしとは申せども、平家の残党ほろび殲さず。かつは函根より西の山路に、盗賊ども徘徊する由きこえましたれば、路次の用心としてかようにいかめしゆう扮装ち申した。上に対したてまつりて、不意撃ちの狼藉なんど、いかで、いかで……。

頼家 たといいかように陳ずるとも、憎き北条の使いなんどに對面無用じゃ。使いの口上聞くにおよばぬ。帰れ、かえれ。

(行親は騒がず。しずかに桂をみかえる。)

行親 これにある女性は……。

頼家 予が召仕いの女子じやよ。

行親 おん謹みの身をもつて、素性も得知れぬ賤しの女子どもを、おん側近う召されしは……。

(桂は堪えず、すすみ出づ。)

かつら 兵衛どのとやら、お身は卜者か人相見か。初見参のわらわに對して、素姓賤しき女子などと、迂濶に物を申されな。妾は都のうまれ、母は殿上人にも仕えし者ぞ。ま

して今は將軍家のおそばに召されて、若狭の局とも名乗る身に、一応の会釈もせで無礼の雑言ぞうごんは、鎌倉武士というにも似ぬ、さりとは作法をわきまえぬ者のう。

(冷笑あざわらわれて、行親は眉をひそめる。)

行親 なに。若狭の局……。して、それは誰に許された。

頼家 おお、予が許した。

行親 北条どのにも謀はからせたまわず……。

頼家 北条がなんじゃ。おのれらは二口目には北条という。北条がそれほどに尊いか。時政も義時も予の家来じゃぞ。

行親 さりとて、尼御台あまみだいもおわしますに……。

頼家 ええ、くだい奴。おのれらの言うこと、聴くべき耳は持たぬぞ。退れすき、すされ。

行親 さほどにおむずかり遊ばされては、行親申し上ぐべきようもござりませぬ。仰せに任せて今宵はこのまま退散、委細は明朝あらためて見参の上……。

頼家 いや、重ねて来ること相成らぬぞ。若狭、まいれ。

(頼家は起ち上りて桂の手を取り、打ち連れて橋を渡り去る。行親はあとを見送る。

芒のあいだに潜みし軍兵つわもの出づ。)

兵一 先刻より忍んで相待ち申したに、なんの合図もござりませねば……。

兵二 手を下すべき機おりもなく、空しく時を移し申した。

行親 北条殿の密旨ことうむを蒙り、近寄つて討ちたてまつらんと今宵ひそかに伺候したるが、さすがは上様、早くもそれと覺さとられて、われに油断を見せたまわねば、無念ながらも仕損じた。この上は修禪寺の御座所へ寄せかけ、多人数一度にこみ入つて本意を遂ぎようぞ。上様は早業の達人、近きんじゆう習の者どもにも手だれあり。小勢の敵と侮りて不覺を取るな。場所は狭し、夜いくさじや。うろたえて同士どうし撃ちすな。

兵 はつ。

行親 一人はこれより川下へ走せ向うて、村の出口に控えたる者どもに、即刻かかれと下げ知しを伝えい。

兵一 心得申した。

(一人は下手に走り去る。行親は一人を具して上手に入る。木かげより春彦、うかがい出づ。)

春彦 おおひと大仁の町から戻もどる路みち々に、物の具したる兵者つわものが、ここに五人かしこに十人屯たむろして、出入りのものを一々詮議するは、合点がてんがゆかぬと思うたが、さては鎌倉の下知に

よつて、上様を失いたてまつる結構な。さりとは大事じや。

(遠近おちこちにて寢鳥ねとりのおどろき起つ声。下田五郎は橋を渡りて出づ。)

五郎 常はさびしき山里の、今宵は何とやらん物さわがしく、事ありげにも覚ゆるぞ。念のために川の上かみしも下を一わたり見廻みまわろうか。

春彦 五郎どのではおわさぬか。

五郎 おお、春彦か。

(春彦は近づきてささやく。)

五郎 や、なんと言う。金窪の参入は……。上様を……。しかと左様か。むむ。

(五郎はあわただしく引つ返しゆかんとする時、橋の上より軍兵一人長卷ながまきをたずさえて出で、無言にて撃つてかかる。五郎は抜きあわせて、たちまち斬きつて捨つ。軍兵数人、上下より走り出で、五郎を押し取りまく。)

五郎 やあ、春彦。ここはそれがしが受け取った。そちは御座所へ走せ参じて、この趣を注進せい。

春彦 はっ。

(春彦は橋をわたりて走り去る。五郎は左右に敵を引き受けて奮闘す。)

第三場

もとの夜叉王の住家。夜叉王は門かどにたちて望む。修禪寺にて早鐘を撞く音きこゆ。

(向うより楓は走り出づ。)

かえで 父様。夜討ちじや。

夜叉王 おお、むすめ。見て戻ったか。

かえで 敵は誰やらわからぬが、人数はおよそ二三百人、修禪寺の御座所へ夜討ちをかけましたぞ。

夜叉王 にわかనికిこゆる人馬の物音は、何事かと思うたに、修禪寺へ夜討ちとは……。

平家の残党か、鎌倉の討手か。こりや容易ならぬ大変じやのう。

かえで 生あやにく憎にくに春彦どのはありあわさず、なんとしたことござりましような。

夜叉王 われわれがうろうろ立ち騒いだとてなんの役にも立つまい。ただそのなりゆきを

観ているばかりじゃ。まさかの時には父子おやこが手をひいて立ち退くまでのこと。平家が勝とうが、源氏が勝とうが、北条が勝とうが、われわれにはかかり合いのないことじゃ。

かえで それじゃと言うて不意のいくさに、姉様あねさまはなんとなさりようか。もし逃げ惑うて過失あやまちでも……。

夜叉王 いや、それも時の運じゃ、是非もない。姉にはまた姉の覚悟があろうよ。

(寺鐘と陣鐘とまじりてきこゆ。楓は起ちつ居つ、幾たびか門に出でて心痛ていの体。向うより春彦走り出づ。)

かえで おお、春彦どの。待ちかねました。

春彦 寄せ手は鎌倉の北条方、しかも夜討ちの相談を、測らず木かげで立聴きして、その由を御注進申し上ぎようと、修禅寺までは駈かけつけたが、前後の門はみな囲つぼまれ、翼つばなれば入ることかなわず、残念ながらおめおめ戻った。

かえで では、姉様の安否も知れませぬか。

春彦 姉はさておいて、上様の御安否さえもまだわからぬ。小勢ながらも近習の衆が、火をちらして追つつ返しつ、今が合戦最中じゃ。

夜叉王 なにを言うにも多勢に無勢、御所方ごしよがたとても鬼神ではあるまいに、勝負は大方知

れてある。とても逃れぬ御運の末じや。蒲殿といい、上様と言ひ、いかなる因縁かこの修禪寺には、土の底まで源氏の血が沁しみみるのう。

(寺鐘烈しくきこゆ。春彦夫婦は再び表をうかがい見る。)

かえで おお、おびただしい人の足音……。鎬しのぎを削る太刀の音……。

春彦 ここへも次第に近づいてくるわ。

(桂は頼家の仮面を持ちて顔には髪をふりかけ、直ひたたれ垂を着て長巻を持ち、手負いの体にて走り出で、門口に來たりて倒る。)

春彦 や、誰やら表に……。

(夫婦は走り寄りて扶たすけ起し、庭さきに伴い入るれば、桂はまた倒れる。)

春彦 これ、傷は浅うござりまするぞ。心を確かに持たせられい。

かつら (息もたゆげに) おお妹……。春彦どの……。父様はどこにじや。

夜叉王 や、なんと……。

(夜叉王は怪しみて立ちよる。桂は顔をあげる。みなみな驚く。)

春彦 や、侍さむらい衆とおもいのほか……。

夜叉王 おお、娘か。

かえで 姉さまか。

春彦 して、この体は……。

かつら 上様お風呂を召さるる折から、鎌倉勢が不意の夜討ち……。味方は小人数、必死にたたかう。女でこそあれこの桂も、御奉公はじめの御奉公納めに、この面をつけてお身がわりと、早速の分別……。月の暗きを幸いに打物とつて庭におり立ち、左金吾頼家これにありと、呼ばわり呼ばわり走せ出づれば、むらがる敵は夜目遠目に、まことの上様ぞと心得て、うち洩らさじと追つかくる。

夜叉王 さては上様お身替りと相成つて、この面にて敵をあざむき、ここまで斬り抜けてまいったか。（血に染みたる仮面を取りてじつと視る）

春彦 われわれすらも侍衆と見あやまったほどなれば、敵のあざむかれたも無理ではあるまい。

かえで とは言うものの、あさましいこのお姿……。姉様死んで下さりますな。（取り継りて泣く）

かつら いや、いや。死んでも憾みはない。賤が伏屋でいたずらに、百年千年生きたとて何となろう。たとい半晌一晌でも、將軍家のおそばに召し出され、若狭の局という名

をも給わるからは、これで出世の望みもかのうた。死んでもわたしは本望じや。

(云いかけて弱るを、春彦夫婦は介抱す。夜叉王は仮面をみつめて物言わず。以前の修禪寺の僧、頭より袈裟をかぶりて逃げ来たる。)

僧 大変じや、大変じや。かくもうて下され、隠もうてください。 (内に駈け入りて、桂を見てまたおどろく) やあ、ここにも手負いが…。おお、桂殿……。こなたもか。

かつら して、上様は……。

僧 お悼いたわしや、御最期じや。

かつら ええ。(這い起きてきつと視る)

僧 上様ばかりか、御家来衆も大方は斬り死……。わしらも傍そばづえ杖の怪我せぬうちと、命

からがら逃げて来たのじや。

春彦 では、お身がわりの甲斐かいもなく……。

かえで ついにやみやみ御最期か。

(桂は失望してまた倒る。楓は取りつきて叫ぶ。)

かえで これ、姉さま。心を確かに……。のう、父様。姉さまが死にまするぞ。

(今まで一心に仮面をみつめたる夜叉王、はじめて見かえる。)

夜叉王 おお、姉は死ぬるか。姉もさだめて本望であろう。父もまた本望じゃ。

かえで ええ。

夜叉王 幾たび打ち直してもこの面に、死相のありありと見えたるは、われ拙きにあらず。

鈍きにあらず。源氏の將軍頼家卿がかく相成るべき御運とは、今という今、はじめて覺

った。神ならでは知ろしめされぬ人の運命、まずわが作にあらわれしは、自然の感応、

自然の妙、技芸神しんに入るとはこのことよ。伊豆の夜叉王、われながらあつぱれば天下一じ

やのう。(快げに笑う)

かつら (おなじく笑う) わたしもあつぱれお局様じゃ。死んでも思いおくことない。ち

つとも早う上様のおあとを慕うて、冥土めいどのおん供……。

夜叉王 やれ、娘。わかき女子が断末魔の面、後の手本に写しておきたい。苦痛を堪こらえて

しばらく待て。春彦、筆と紙を……。

春彦 はっ。

(春彦は細工場に走り入りて、筆と紙などを持ち来たる。夜叉王は筆を執る。)

夜叉王 娘、顔をみせい。

かつら あい。

（桂は春彦夫婦に扶けられて這いよる。夜叉王は筆を執りて、その顔を模写せんとす。僧は口のうちに念仏す。）

—幕—

青空文庫情報

底本：「日本の文学 Ⅶ 名作集（一）」中央公論社

1970（昭和45）年7月5日初版発行

初出：「文芸倶楽部」

1911（明治44）年1月

入力：土屋隆

校正：小林繁雄

2006年4月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

修禅寺物語

岡本綺堂

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>